――みなさんと江東区の文化財をつなぐ情報紙――

下町文化

No.314
2026.10.2
発行
江東区地域振興部
文化観光課文化財係

江東区文化財保護強調月間２０２６

歴史と文化を考えよう

江東区の文化財を知り、身近に感じていただくために、10月から11月にかけてさまざまな事業を開催します（詳細は2・3頁）。

香蝶楼（一陽斎）豊国「亀戸藤乃景」（国立国会図書館デジタルコレクション）

令和8年（2026）は、役者絵や美人画などで人気を博した浮世絵師・歌川国貞（三代歌川豊国）（1786～1864）の生誕240年目にあたります。本所五ツ目の渡し場付近に住み、渡船の株を持っていたことから「五渡亭」と号したほか、香蝶楼・一陽斎などの号もあり、その作品数は当時の浮世絵師の中でも最大級といえます。後に亀戸天神社の門前に住み、現在、光明寺（亀戸3－42－1）には江東区登録史跡「歌川豊国（国貞）墓」があります。掲載した浮世絵は、江戸時代から藤の名所として知られた亀戸天神社にちなみ、亀戸と藤を画題として描かれたものと考えられます。

○江東区文化財保護強調月間2026
民俗芸能大会 ……2
文化財講演会 ……2
東京９区文化財古民家めぐり ……2
江東区伝統工芸展 ……3
○江戸防衛の要　中川番所と水運の歴史を学ぶ
中川船番所資料館……4
○深川江戸資料館にみる江戸の日用品③
江戸時代の家具・長火鉢 ……5
○芭蕉記念館企画展での新たな出会い
深川を愛した俳人・八田木枯 ……6
○国登録有形文化財の活用
深川東京モダン館の事例 ……7
○令和７年度　区外史料調査報告／
深川北部民俗調査報告 ……8

無形民俗文化財公開事業

民俗芸能大会

10月18日（日）

会場　都立木場公園

【午前11時～12時30分】

場所　入口広場（イベント池）

木場の角乗　東京木場角乗保存会

江戸時代、木場の川並はタメ竿一つで材木を筏に組んでいました。角乗は、その仕事の余技として生まれました。

【午後1時30分～4時】

場所　イベント広場（メインステージ）

木場の木遣　木場木遣保存会

木場の川並衆が材木を繰る時、お互いの息を合わせるため、歌われた労働歌です。

木場の木遣念仏　木場木遣保存会

木場に伝えられたもので、大数珠を手繰りながら念仏を唱える大変珍しいものです。

砂村囃子　砂村囃子睦会

江戸時代中期に金町の香取社（現葛飾区葛西神社）の神官が農民に教えた祭囃子の流れを汲むお囃子です。

富岡八幡の手古舞　富岡八幡の手古舞保存会

富岡八幡宮の祭礼で神輿の先頭に立ち、木遣を歌いながら、男髷に裁着袴という粋ないでたちで練り歩きます。昔は、辰巳芸者が行いました。

深川の力持　深川力持睦会

江戸時代から倉庫地帯であった佐賀辺りで、米俵や酒樽などの運搬をする人々の余技として芸能化しました。

木場の角乗（右下）
木場の木遣（右上）
砂村囃子（中上）
富岡八幡の手古舞（左上）
深川の力持（左下）

文化財講演会

「将軍の鷹狩と江東区域の村々」

江戸時代、江東区域の村々は徳川将軍家の鷹狩の場に指定されていました。そこで、区域の村々が登場する古文書（歴史資料・和紙に記された明治以前の文書）を用いて、将軍の鷹狩と人々の暮らしとの関係についてお話しします。

日時　11月25日（水）
午後6時30分～8時

場所　教育センター1階大研修室（東陽2―3―6）

定員　50人（応募多数の場合は抽選）

費用　無料

講師　根崎光男氏（江東区文化財保護審議会委員、法政大学名誉教授）

応募期間　10月19日（月）必着

申込方法　区HP申込（1申込につき2名まで）。または往復はがき（1枚につき2名まで）の往信面裏に①「文化財講演会」②住所③氏名・ふりがな④電話番号を記入、返信面表に応募者の⑤郵便番号⑥住所⑦氏名を記入し、〒135―8383
江東区役所　文化観光課文化財係へ。

※消せるボールペンでは記入しないでください。

東京文化財ウィーク2026

「東京9区文化財古民家めぐり」

期間　10月1日（木）～11月30日（月）

今年度も東京文化財ウィークの関連事業として、東京9区文化財古民家めぐりが開催されます。

文化財古民家を所有する都内の9区（足立・板橋・江戸川・北・杉並・世田谷・練馬・目黒・江東）では、連携して企画事業を行っており、毎年共通のテーマにもとづく解説パネルを各古民家に設置します。

江東区では、江戸時代後期の民家建築である旧大石家住宅を、仙台堀川公園内（南砂5―24地先）に移築し、公開しています。他区の古民家の情報につきましては東京都教育庁ホームページの「東京文化財ウィーク2026」企画事業欄をご参照ください。

この機会に、各区の古民家をめぐって、各住宅の特徴を見比べていただければ幸いです。

旧大石家住宅

旧大石家住宅の開館日・時間

開館日　土曜日・日曜日・祝日

開館時間　午前10時から午後4時

無形文化財公開事業

江東区伝統工芸展

入場無料

10月30日（金）～11月3日（火・祝）
午前10時～午後4時

会場　深川江戸資料館 地下1階レクホール
（江東区白河1―3―28）

45回目となる本展では、伝統工芸の技を受け継ぐ区無形文化財保持者による実演・体験を行います（日程表参照）。
また、今回は建具（たてぐ）の特集展示を行います。ぜひご観覧ください。

実演・体験時間

〈午前の部〉午前10時～ 12時30分
〈午後の部〉午後1時30分～4時

体験（有料）ができる技術もあります。（実演公開日程表のうち*印）。申し込みは会場で直接職人さんに申し出てください（材料が無くなり次第終了します）。

伝統工芸品即売（会期中）

会場内で、江東区伝統工芸保存会による工芸品の即売が行われます。またとない機会ですので、是非どうぞ。

会場・深川江戸資料館への交通

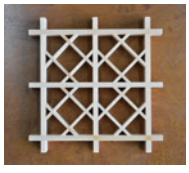
●東京メトロ半蔵門線「清澄白河」下車徒歩3分
●都営大江戸線「清澄白河」下車徒歩3分
●都バス門33「清澄庭園前」下車徒歩3分
●都バス秋26「清澄白河駅前」下車徒歩4分

実演公開日程表

日程		技術	保持者
10/30（金）	午前	建具	友國三郎
		＊ 茶の湯指物	山田一彦
		刀剣研磨	臼木良彦
		江戸切子	小林淑郎
	午後	建具	友國三郎
		襖framed・襖縁	鈴木延坦
		相撲呼出し裁着袴製作	山口由紀
		江戸切子	小林淑郎
10/31（土）	午前	建具	友國三郎
		＊ 表具	岩崎　晃
		紋章上絵	亀山晴男
		＊ 無地染	近藤良治
	午後	＊ 建具	友國三郎
		＊ 表具	岩崎　晃
		帯製作	杉浦正雄
		＊ 無地染	近藤良治
11/1（日）	午前	建具	友國三郎
		相撲呼出し裁着袴製作	山口由紀
		＊ 木彫刻	渡邉美憲
		＊ 表具	岩崎　晃
	午後	＊ 建具	友國三郎
		＊ 茶の湯指物	山田一彦
		刀剣研磨	臼木良彦
		＊ 表具	岩崎　晃
11/2（月）	午前	建具	友國三郎
		相撲呼出し裁着袴製作	山口由紀
		帯製作	杉浦正雄
		＊ 無地染	近藤良治
	午後	建具	友國三郎
		襖framed・襖縁	鈴木延坦
		＊ 木彫刻	渡邉美憲
		＊ 無地染	近藤良治
11/3（火・祝）	午前	建具	友國三郎
		襖framed・襖縁	鈴木延坦
		刀剣研磨	臼木良彦
		＊ 木彫刻	渡邉美憲
	午後	＊ 建具	友國三郎
		相撲呼出し裁着袴製作	山口由紀
		刀剣研磨	臼木良彦
		＊ 木彫刻	渡邉美憲

※都合により変更する場合もありますのでご了承ください。
※*印は体験を行います（有料）。
・表　具「裏打ち体験」1,000 円から（サイズに応じ）
・無地染「手ぬぐい絞り板締め」3,000 円
・建　具「組子コースター（角枡つなぎ）」1,500 円
　「同（亀甲麻の葉）」2,000 円
・指　物「箸」2,000 円／「小箱」2,500 円
・木彫刻「亀の根付」2,000 円／「茄子形」3,000 円

亀甲麻の葉


角枡つなぎ

江戸防衛の要　中川番所と水運の歴史を学ぶ

中川船番所資料館

川と共に生きる江東区

現在江東区は荒川、隅田川に挟まれ、区内には11の内部河川が流れています。台風や豪雨など長年水害に悩まされてきた一方で、物資輸送などで川を利用するなど川と共に生きてきました。小名木川、横十間川などの内部河川の多くは江戸時代に作られた運河（人工の河川）です。現在のように飛行機、鉄道、トラックなどの交通手段がなかった時代では、船を使って物を運ぶ水運が主要な輸送手段として活躍していました。江戸時代、江戸の町が水の都といわれたのも、船で町の隅々まで物資が運べるようになっていたためでした。

江戸時代の川の関所

江戸時代、治安維持のため人々の自由な往来は制限されていました。そこで怪しい人物、危険な物資が持ちこまれていないか確認を行う、現在の税関や保安検査のような役割を担う関所がおかれていました。関所は古代から存在していましたが、江戸時代になって峠や河川の渡し場など人・物資が集まる交通の要衝各地に設けられました。陸の関所としては箱根関所（現神奈川県箱根町）が有名です。江戸時代の半ばごろ（延享2年〈1745〉）時点で53か所の関所がありました。その一つが、江戸の防衛拠点でもあった中川番所（中川関所ともいう）でした。

『江戸名所図会』などを参考に再現。
番小屋（手前）と通関する酒を積んだ船

中川番所は小名木川を往来する人・物資を監視する施設として寛文元年（1661）に設置されました。それ以前は小名木川と隅田川が交差する地点（万年橋の北岸）に深川番所が置かれていました。明暦の大火（明暦3年〈1657〉）を契機に江戸市中が隅田川以東（本所・深川地域）に拡張されたことから、現在の小名木川と中川が交差する地点へ移転されました。

中川番所では江戸市中へ運ばれる酒・米・野菜といった食料品の改めを行ったほか、鉄砲などの武器・武具については厳重な通関手続きをしないと通さないなど、江戸の水際対策を担っていました。中川番所は明治2年（1869）、全国の関所が廃止されるまでのおよそ200年間同地に設置されていました。

中川番所を再現した資料館

平成15年（2003）に開館した中川船番所資料館では、中川番所の歴史を紹介するほか、当時の雰囲気を味わえるよう、江戸時代当時の絵図や発掘調査の成果をもとに実物大で建物の一部を再現しています。天井に屋形船の意匠を模したエレベーターに乗って3階に上がれば、中川番所の光景が視界一杯に広がります。建物だけでなく展示室の壁面や床を使って番所が建っていた景色を再現しているところが見どころの一つとなっています。また、音響や照明を用いて中川番所が建っていた川沿いの風景を意識した情景演出を行っているほか、再現ジオラマ内にある人物の切出しパネルに近付くと、番所を通過する際の役人と船頭のやりとりを再現した音声などを聞くことができます。

2階では区民をはじめとした方々から寄贈いただいた資料で昭和30年代頃の暮らしを再現

この他、江戸時代から明治時代の小名木川を中心とした水運を紹介しているほか、2階では江東区の歴史を学べる展示を行っています。また、企画展として年5回季節に合わせた釣具の展示を行っているほか、災害や水運など、江東区の歴史に関わる様々なテーマで特別展・企画展を開催しています。

四季折々の川辺の風景を楽しみながら江戸の水運を学べる中川船番所資料館へぜひお越しください。

【施設利用案内】

所在地：大島9―1―15
問い合わせ：03（3636）9091

（中川船番所資料館　佐藤由梨）

深川江戸資料館にみる江戸の日用品③

江戸時代の家具・長火鉢

はじめに：四季情景の再現について

深川江戸資料館では、江戸庶民の日常を再現展示する一環として、季節に応じた日用品を配置しています。例えば、簾を掛け、障子を風通しの良い葦戸に替えることで夏の暮らしを表現し、炬燵や火鉢を設置し、江戸時代の冬の暮らしの一端を再現しています。

冷暖房の普及や生活様式の変化により、簾や火鉢を日常で目にする機会は少なくなりましたが、こうした江戸庶民の暮らしや生活文化を後世へ伝えていくことも、当館の役割の一つであると考えています。

今回は、再現展示の家具として通年配置している火鉢の一種、「長火鉢」をご紹介いたします。

長屋「大吉」の長火鉢
五徳の上に鉄瓶を掛けてあり、
前面に引き出しがあります。

火鉢について

火鉢は、その系譜を奈良時代までさかのぼるとされ、近世以降に広く普及し、近現代に至るまで日本人の暮らしに身近な暖房器具として用いられてきました。室内全体を暖めるほどの暖房能力はありませんが、手をかざして暖を取ることができます。

また、薪を燃やす囲炉裏とは異なり、燃料に炭火を用いるため、煙が出にくいことも特徴です。使用時期は寒暖に応じて、9月中旬頃から3月末頃までとされました。

長屋「松次郎」の
手あぶり火鉢
今戸焼の鉢に
炭と灰が入っています。

長火鉢の形状と機能

火鉢には角形や丸形などさまざまな種類があります。当館で展示している長火鉢は、「江戸長火鉢（関東長火鉢）」と呼ばれる、引き出し付きの袖机と一体化した長方形の火鉢です。

内部には銅壺や五徳が据えられ、五徳の上に鉄瓶を掛けて湯を沸かすことができます。また、海苔を炙ったり、茶葉を炒ったりするなど、簡単な加熱調理も可能でした。さらに、前面の引き出しには楊枝や煙草、海苔などの日用品が収納できました。

長火鉢の外装には、耐火性に優れ、加熱による収縮や変形が生じにくいケヤキや黒柿、紫檀などの広葉樹材が用いられています。一方、炭を収める炉部には銅板を張り、耐熱性と耐久性を備えた構造となっています。また、端に「猫板」と呼ばれる横板を渡し、簡易的な卓として利用する例も多く見られます。

このように、長火鉢は単なる暖房器具としてだけでなく、湯沸かしや収納など、複数の機能を備えた家具であり、江戸庶民の暮らしを支える生活用具といえる存在でした。

長火鉢の炭の扱い方

長火鉢を使用する際、炭火を絶やさないよう、炭の継ぎ足しや灰の手入れが日常的に行われていました。

明治・大正期の家事作法を紹介した書籍には、次のように記されています。

「長火鉢はいうまでもなく、毎朝きれいに掃除し、火つぼ（炭火を起こすために灰をくぼませた部分）をよく掘って、次に切り炭をその大きさに従い二つなり三つなりよくいけて、その上に火種を乗せ、まず周りにざっと灰を寄せておき、半分ごろ（火が）おこったところで更によくいけて、むやみに掻き立てないようにすること」（羽仁もと子『女中訓』）。

長火鉢に頬杖をついている女性
一勇斎国芳「つじうらをきく」
（国立国会図書館デジタルコレクション）

近代の一例であり、江戸時代の実態と必ずしも一致するものではありませんが、当時の火鉢の扱いを知るうえでの参考となります。

おわりに

長火鉢をはじめ、展示室の長屋や商店に配置している日用品は、その用途を知ることで、当時の暮らしでどのように使われ、どのような存在であったのかをより深く理解することができます。こうした一つひとつの道具への関心が、江戸庶民の生活をより具体的に想像することに繋がります。

当館は本年で開館40周年を迎えました。これからも、展示やイベントを通じて、江戸庶民の生活文化や風習の魅力を次世代へ継承してまいります。

※主な参考文献
深川江戸資料館和文解説書
浅見雅子「住宅調度の研究（第三報）」

【施設利用案内】

所在地：白河1―3―28
問い合わせ：03（3630）8625

（深川江戸資料館　伊藤友香子）

芭蕉記念館企画展での新たな出会い

深川を愛した俳人・八田木枯

八田木枯（大正14〈1925〉～平成24〈2012〉）は三重県津市出身で、実家は材木商を営んでいました。戦後、20歳頃から商用で上京し、材木置場があった木場を訪れています。のちに新宿区四谷に転居してからは木場の材木商社長谷川萬治商店（ハセマン）で70代まで働きながら、亡くなる直前まで作句に取り組みました。

俳人としての八田木枯

木枯の俳句について蘭草慶子氏（俳人）は「木枯は生涯で三度、作風を変えた。十代の「ホトトギス」時代は花鳥諷詠の写生句だった。やがて伝統俳句にない新しい表現に惹かれ、二十代で山口誓子に師事。新興俳句の中心だった「天狼」を代表する作家として活躍した。その頃の句に〈汗の馬なほ汗をかくしづかなり〉など。しかし家業のため、三十代で俳壇から遠ざかる。そして五十代で同人誌「晩紅」を創刊、俳壇に復帰すると〈晩年や闇切りひらく紅き凧〉など、「天狼」時代とも全く違う独自の句境を拓いた。木枯の美意識が選び取った言葉による虚実皮膜で玄妙な世界は、木枯ワールドとも呼ばれるもので、妖しく懐かしく読む者を異世界に誘い込む。名人は危うきに遊ぶという言葉があるがそんな作家だった。」（一部省略）と評しています。

木枯の作品

写真1　八田木枯句短冊（個人蔵）

独自の句境を開いたという晩年の木枯の一句「人戀ひのかたちに鶴は凍りけり」（写真1）を蘭草氏は、「季語は凍鶴。鶴が厳寒の中、長い首を翼の間にはさみ、凍りついたように片足で立ちつくす姿を表す。作者はそれを「人戀のかたち」と見た。人を恋う思いを、凍鶴として形象化するところに木枯の美意識をみる。「凍」という一字によって、時がとまったかのように動かない鶴の姿が美しく悲しく描かれ、恋心の永遠性をも思わせる。木枯句のもつ言葉の力である。鶴は、雁、鏡、母などと共に木枯作品によく登場する木枯好みのモチーフ。」と解しています。

さらに「生きてゐるうちは老人雁わたし」（写真2）は、「老人となってからは死ぬまで老人のままである。確かにその通りなのだが、こんなことを今まで詠んだ俳句はない。実にあっけらかんと、物悲しくもユーモラスな言い回しである。秋になって雁が渡って来る頃に吹く北風を雁渡しというが、その風に吹かれながら作者は、渡る雁を思い、自らの老いを肯うのだ。掲句を収録する『夜さり』には、七十代の句が収録されている。そのあとがきで作者は「滋味ふかき老い」を詠みたい、と記している。」（同氏）と鑑賞します。

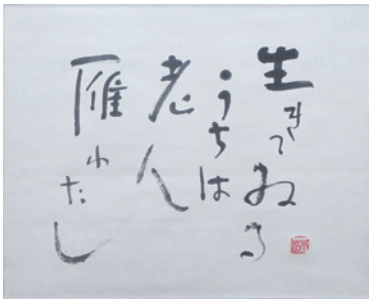


写真2　八田木枯句色紙

木枯を通してみる江東区の風景

昭和21年（1946）11月頃、木枯は仕事で木場を訪れた際に、憧れの俳人の一人だった砂町在住時代の石田波郷を訪ねています。そこで空襲で焼け野原の中に所々バラックが建っている、という風景を見たと証言しています。

また、木枯は「深川は私のホームグラウンド」といい、よく俳人仲間や家族と深川の飲食店を訪れました。三橋敏雄・鈴木六林男・佐藤鬼房・松崎豊などと夜半まで深川で遊んだといい、鰻の宮川をはじめ、森下の桜鍋のみの家、高橋の泥鰌屋伊せ喜、門前仲町の洋食屋中じ満などがお気に入りでした。

戦後、後進に大きな影響を与えた俳人・八田木枯は江東区にもその足跡を残しています。

八田木枯肖像写真（個人蔵）

参考文献

八田木枯『生誕百年 八田木枯 戦中戦後私史』2025、晩紅発行所

蘭草慶子「芭蕉記念館前期企画展 展示キャプション」2026

鳥居真里子・蘭草慶子・西村麒麟「芭蕉記念館トークショー 江東区ゆかりの俳人・八田木枯」レジメ、2026

【施設利用案内】

所在地：常盤1―6―3

問い合わせ：03（3631）1448

（芭蕉記念館　斉藤照徳）

国登録有形文化財の活用
深川東京モダン館の事例

平成8年（1996）10月1日、文化財保護法の一部が改正されました。これは、社会の在り方が大きく変化し続ける中で、多種多様な建造物を後世に伝えるべく、緩やかな保護を前提としたもので、これによって誕生したのが、国登録有形文化財です。

この制度は今年で導入30年を迎え、現在全国各地に14，884件の登録有形文化財が存在しています（令和8年〈2026〉7月9日現在）。江東区内には、6件が所在しており、その一つ「旧東京市深川食堂」を活用するため、平成21年（2009）に開館したのが深川東京モダン館です。

この建物は、昭和7年（1932）4月に食堂として開業した後、内職補導所、福祉作業所と用途が変更され、現在は江東区の文化・観光施設となりました。開館当初は、深川観光協会によって管理・運営が行われ、平成31年（2019）一般社団法人江東区観光協会へ管理・運営が引き継がれました。1階の嗜好品食堂室であった空間は、まちあるき案内所であり江東区文化観光ガイドが午前11時と午後2時に館周辺のスポットガイドを行い、あわせて江東区内の文化・観光情報を得ることができます。また、2階は定食堂室であった空間が多目的スペース、従業員控室の一部は会議室となり、貸館や館事業を行う空間となっています。

モダン館は、博物館や図書館でもなく、博物館法や図書館法といった法律に基づく施設ではありません。したがって、自由度が高い部分があるものの、「旧東京市深川食堂」のイメージをうまく伝えることを重要視しています。2階にはIHコンロを装備したカウンターキッチンが配置されていることから、月1～2回ほど学校栄養職員や調理に従事していた人たちによるランチ営業や、深川めし振興協議会との共催で東京の郷土料理「深川めし」を理解してもらうイベントを開催しています。また、開館当初から深川在住の三遊亭圓橘師匠が落語会「圓橘の会」を行い、その後、講談師の神田陽子・紫両先生らによるモダン講談会を年4回開催してから、館事業や貸館などで落語会や講談会が増えていきました。

また、かつて江東区内には仙台藩蔵屋敷があったという接点から、宮城県仙台市太白区秋保町を拠点とする手しごとAKIUとの共催イベント、福祉作業所の来歴を持つ建物の歴史にちなんだイベントとして、大阪府東大阪市の障がい者生活介護事業を行うアトリエライプハウス所属の作家による美術展なども開催しています。そして、近代の歴史的建造物である展示空間を活かして、歴史講座や江東区の近現代史にちなんだ企画展も行っています。

平成25年（2013）4月には、深川門前仲町地区が江東区の景観重点地域に指定され、区民形成団体である「深川門前仲町景観まちづくりの会」が立ち上げられました。これは江東区富岡管内に所属する20町会をはじめ、富岡八幡宮や深川不動堂、東京海洋大学などが参加し、当該地域の景観などに関連する課題に取り組んでいますが、当館もその団体に加わっています。それは、この館をより多くの人に知ってもらうため館周辺の地域に働きかけることが必要であると考えるからです。深川東京モダン館という「場」をもとにして、地道に地域内外の「ひと」や「もの」をつないでいくことこそ、文化財「旧東京市深川食堂」をより良い形で後世に引き継いでいく「カギ」となるのではないでしょうか。

保存ゾーンの階段　床面には六角形のモザイクタイルがはめられている

【施設利用案内】

所在地：門前仲町1―19―15
問い合わせ：03（5639）1776
（深川東京モダン館管理事務所副所長　龍澤 潤）

令和7年度　区外史料調査報告

令和8年2月24日から25日にかけて、文化財専門員2名にて区外史料調査を行い、京都市歴史資料館（上京区松蔭町。以下、同館）を訪れて亀戸香取神社（亀戸3）に関する史料群を収集しました。史料は「江戸亀戸香取社内金毘羅大権現開帳一件記録」と題する簿冊（2冊・169枚）と「奉願口上書」をはじめとする書状16点、合計17点からなります。なお、原史料は京都の霊源寺（北区西賀茂北今原町）が所蔵しており、同館では写真撮影されたものを複写保管しています。本調査では、こちらを複写収集しました。

「香取太神宮」（『江戸名所図会』、国立国会図書館デジタルコレクション）

同館歴史調査員吉住恭子氏によると、本史料群は「霊源寺文書」の中に含まれており、『京都市史』を作成する際に収集されたものです。なお、本史料の存在は、既に井上智勝氏により触れられていますが（同「神道者への道、神道者からの道」『身分的周縁を考える（身分的周縁と近世社会）民間に生きる宗教者』吉川弘文館、2008年）、以降、現在まで、全体像の解明（含翻刻・史料解釈）は進められていません。

江東区では、震災（1923）・戦災（1944～45）等により、特に紙史料が失われたことから、疎開史料を含む区外史料の発掘・収集に力を入れてきました。亀戸香取神社につきましても、江戸期の地誌や随筆などで知られていますが、神社の実態や地域との関わりなどについては不明な点が多くあります。本史料群は、日本橋の小祠谷坊稲荷大明神の社人（近世神社の神職の内、実際の祭祀などを行う。神主〈宮司〉とは異なる存在）摂原隼人（後、香取備後と名を改め同社の神主となる）が、同町商人美濃屋正助（美濃屋薬房、現エスエス製薬）とともに霊源寺がもつ金毘羅尊像の写を「亀戸香取太神宮」に祀って開帳を行うまでの過程が詳しく記されたものです。なお、本像は霊元天皇の典侍で東山天皇生母である敬法門院（松木宗子〈1658～1732〉）が崇拝したもので、後に同寺に寄進されました。

今後は本史料群の翻刻を進める中で内容を検討して参ります。

なお、本調査では京都市歴史資料館主任歴史調査員 松中博氏、同歴史調査員 吉住恭子氏にお世話になりました。重ねて御礼申し上げます。

令和7年度　深川北部民俗調査報告

平成9年度（1997）調査から28年の歳月を経て、団員18名による民俗調査（話者への聞き書き）が深川北部（清澄、常盤、新大橋、森下、平野、白河、三好、高橋、千石、石島、千田、海辺、扇橋、猿江、住吉、毛利）を対象に実施されました。なお、本区の調査の特徴は、区民自らが区民に話を聞くことにあり、調査を通じて区民間の交流が生まれ地域コミュニティーの形成が促進される効果が期待されます。

本調査では、高度経済成長期に幼年・青年期を過ごした話者の話のほか父母・祖父母などから聞いた話なども採取されました。江戸時代、早くから町場化した深川地域は、人々の移動・交流が著しく、明治時代以降も都市化により同様の傾向が見られました。現代においても、土地の開発や集合住宅の建設や世代交代等により、新旧住民が入れ替わったり、混在したりしています。こうした中で消滅した民俗もありますが、新たな行事や慣習も生じています。日常にある民俗は、日常にあるがゆえに見過ごしがちで、時代や生活の変化等により急速に消滅することがこれまでの歴史から明らかです。また、日常的なものは特別と感じることが少ないため「記録」されることも稀です。ですから、意識的に記録していくことが大事なのです。毎日通る道でも、ふと立ち止まると周囲の環境が変わっていることがあります。読者の皆さんもご経験があるのではないでしょうか。気付いたら、以前あったお店が無くなり大きなビルになっているというように。50年も経てば、世代交代等により人々の記憶も町の記憶も徐々に失われ、100年もすれば消滅する可能性があります。本調査の結果は、江東区の歴史・民俗の記録として報告書にまとめ後世に残して参ります。区内図書館に配架予定ですのでご覧いただければ幸いです。

（文化財専門員　大関直人）

お詫びと訂正　本紙№312　7頁の表内に誤りがありました。お詫びして訂正いたします。

宗派　光明寺　誤：真言宗　正：天台宗

龍光寺　誤：天台宗　正：真言宗

下町文化　No.314
令和8年（2026）10月2日 発行
編集・発行
江東区地域振興部
文化観光課文化財係
〒135-8383
江東区東陽4-11-28
TEL（03）3647-9819
https://www.city.koto.lg.jp

SPORTS & SUPPORTS KOTO City in TOKYO
トーキョーの、ちょっと東。すごく今。